

## 新 知 見 あ れ こ れ (9)

奥 原 弘 人

H. Okuhara : Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture

### (1) スギモトアザミなるもの

スギモトアザミ *C. sugimotoi* Kitam. については杉本順一氏の「日本草本植物総検索誌双子葉編」と「長野県植物総目録」とに記録されていて、前書には

J<sup>2</sup>葉は通常抱脚する。総苞片は厚くて幅が広い。

K<sup>1</sup>葉の下面に白毛がある。

L<sup>1</sup>葉の下面に雪白色の綿毛がある。…ウラジロアザミ

L<sup>2</sup>葉の下面は上葉のみ雪白の綿毛があるも下葉の下面に綿毛は薄くて雪白でない。…

スギモトアザミ

とあり、後書には、北西部の亜高山と温帯界の草地に稀、北ア(白馬・徳本・槍・上高地・安房峠)1933年筆者が岐阜県平湯及び安房峠に発見、とあって、この両書によって、その形態と産地を知ることができる。

私は県下のアザミ属を調べるに当たり、前からスギモトアザミに注目し、野麦峠でも以前にそれらしいものを見ている。

昨年8月安曇村誌のための調査において齊藤定美氏と安房峠を調べることになりスギモトアザミの発見地であるこの地の調査は絶好の好機とばかり特に注意して、それらしいもの数株を見ることが出来た。

考えてみれば上記の記載からみてスギモトアザミなるものはノリクラアザミに極めて近いもので、その変わりものか雑種であるとみることが出来、一時私は雑種と考え、某書にもそのように記されているが、上記の産地のような高所には片親のナンブアザミは見られないので雑種とみるのは無理である。

したがってスギモトアザミはノリクラアザミの変わりもので、その一品種とみるのが至当と考える。とすれば学名は *C. norikurense* form *sugimotoi* となる。但し野麦峠においては雑種の生れる可能性がないとは言えない。

### (2) ホソバノキリンソウの新変種

1990年8月8日松本市東部の武石峰の一角1,770mの地点において葉の細長いホソバノキリンソウを見つけた。花をつけたもの11本と花のないもの3本が1株となっていた。

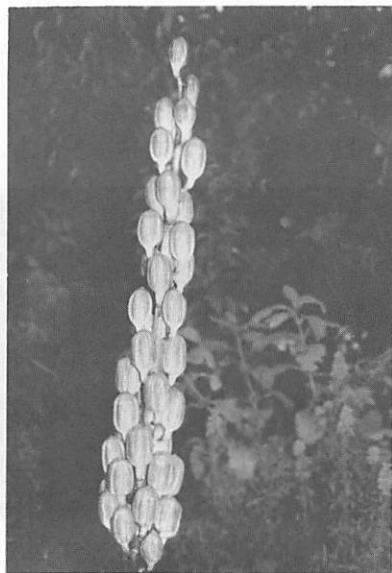
茎は高さ約55cm、下部の葉は枯れていたが中部以上には多数互生し、花序に接近する2~3葉は短かったが、他は長さ8~10cm、幅8~11mm、先端は尖り、縁には下部から鋸歯があって、その数10~13。

武石峰には1~3立ちのホソバノキリンソウが多いが、今回見たのは多数が叢生し葉が細長い。これはホソバノキリンソウの変種とみられるのでナガバノキリンソウ *Sedum aizoon* var. *leptophyllum* と呼ぶこととしたい。

### (3) 多花性のオオウバユリ

過ぐる1981年10月7日南安曇郡奈川村大唐沢において多数の果実をつけたオオウバユリを採取し本会の例会に呈示したことがあるが、文書にしたことはなかったので、ここに記すことにする。

この標本は今も手元に保管しているが、全高は1.7mほどあった。44個の果実がつき、2個の落痕があるので46個の花があったことになる。附近には30個内外の果実をつけたのも数本あった。このように個体数が複数であることは単なる奇形とみることは出来ないので、これを品種とみてカズザキオオウバユリ *C. gleinii* M. multiflorus と呼びたい。



カズザキオオウバユリ

81年10月7日

#### (4) イワタケソウの新変種

1990年8月8日前記ナガバノキリンソウを見つけての帰路、袴腰山の一角において見られないイネ科の草本が目にとまった。帰宅して調べたところイワタケソウに近いものと分かったが幾つかの点で異なっていた。

そこで「日本イネ科植物図譜」の著者長田武正博士に送って同定をお願いしたところ、間もなく頂いたお答は、イワタケソウに近い同属の新種と思うが顕微鏡の使用を禁じられているので詳細な検討は出来ません、とのことであった。

そこで自分で調べたところ、イワタケソウと異なり、花穂の長さ8~9cm、護穎の長さ7~8mm、芒の長さ12~16mmと何れもイワタケソウより短く、高茎草本の中に混っていたせいか高さは1.3cm内外と高く、花穂は多少曲がってはいるが垂下というほどではなかった。

以上の諸点からみて、これはイワタケソウの変種に相当するものと考え、これをチクマイワタケソウ *Hystrix japonica* Hack. ver. *chikumensis* と呼ぶこととする。

なおイワタケソウの分布は文献によれば長野（南信）岐阜・三重・滋賀・山形の諸県と四国・九州とある。この点からみて松本市の産は北に飛んで分化したものと考えられる。

なおまた上記長野（南信）とある点について国立科学博物館の標本には古瀬、勝又両氏が大鹿村、村松光喜氏が同村の尾高山と豊口山、水島博士が美和村、柄山氏が同村白岩での採品があることを付記する。これは中池博士のご好意によるものである。

#### (5) キソホトトギスについて補記

これについては先に本誌第8号に予報的に発表し

ておいたが、その形態については述べていなかった。昨年再び現地でこれを観察したので改めてここに記述することとする。

これは木曽郡南木曽町の田立滝付近に産するタマガワホトトギスの変種とみられるもので、この溪谷の急斜面や岩棚の上に生える。茎は長さ25~40cm短くて細く、横に伸びて上部は多少垂れ下がり、茎頂に1~2個、時には3個の花をつける。葉は長さ10~15cm、幅2~2.5cmと細長く、上部は長く尖る。この葉形からスルガジョウロウホトトギスとみた研究者もあった。花は7月中旬から8月にかけて上向きに開き、花被片は長さ約2cmでやや小さく淡黄色である。近年観光客が多くなり山草ブームによって僅かになったことを残念に思う。

#### (6) ヨツバヒヨドリの変わりもの

1990年8月5日南安曇郡奈川村入山の山地において葉が7枚ずつ輪生する形のヨツバヒヨドリを見つけた。1株に5本群立っていたが、何れも同様に、葉は長さ15~19cm、幅約2cmと細長く、鋸歯はやや長く尖る。この形のものは初見で文献でも見られないので、これを新品種とみとめナナツバヨヒドリ *Eupatorium chinanense* L. subsp. *sachalinense* Kitam. form. *azumiensis* とする。

#### (7) コホタルイの変わりもの

大町市の居谷里や稲尾の休耕田にはコホタルイが多いが、このものは標準と次の2点で異なっている。文献によれば本種の小穂の数は3~10個で長さ5~8mmとあるが、大町市のものは6~17個と極めて多く、長さが4~9mmと大小の差が大きい。

国立科学博物館には古瀬義氏が軽井沢で採った標本もあるが、これも大体同じである。県の東端と西端に同形のものがあるということは興味深い。今後この中間でも見つかりそうに思う。これを変種と見てミスズコホタルイ *Scirpus komarovii* Rosheu. var. *shinanensis* としたい。

なおここにはタイワンヤマイ *S. wallichii* Nees も僅かながら見られる。杉本目録には本種は記載されていないが、国立科学博物館には古瀬氏が北御牧村で、小坂忠二郎氏が原村で採った標本があるが同定者は不明である。拝見は中池博士のご好意によるので、厚く御礼申し上げる。

#### (8) フジクラアザミ第2の産地

先年白骨温泉においてフジアザミとノリクラアザミの雑種とみられるものを発見し、フジクラアザミと命名したが、その翌年災害によって姿を消してしまった。



キソホトトギス  
89年8月4日

昨年8月安曇村誌のための調査で齊藤定美氏の車に便乗して安房峠からスーパー林道を白骨温泉に向かって走行中安房山の中腹で本雑種とみられるもの2株を見つけた。付近にはノリクラアザミが多く、100mほど離れたがれ場にはフジアザミの群落があった。齊藤氏と共にこれを見て安心した。

(9) オンタケブシを見る

オンタケブシは明治43年に小泉源一博士が御岳で発見したもので、標本は東京大学にあって私も前川博士のご好意で、これを拝見し葉の輪郭だけはノートにとってある。昭和23年には田村道夫博士も採って標本は京都大学にあるという。この両氏の他にこれを見たという話は聞こえず、私も長年注意してきたが幸運に恵まれなかった。

ところが1昨年木曽郡南木曽町にトリカブトの1種があると聞き今井建樹氏と共に同町上野原に赴き

海拔60cmの古根丈弘氏の竹藪の縁に1群のトリカブトを見た。葉が大きく今まで見たことのない葉形であった。これを門田祐一博士に送って、これがオンタケブシとの回答を頂いて、御岳から離れたこんな低い所にと驚喜喜んだ。

古根氏の話では同町の与川にトリカブトを栽培している人があるとのことで、昨年同氏の案内で、そこを訪れた。広い畑ではなかったが栽培し切花として名古屋へ出荷しているとのことであった。これを門田博士に報告すると遠路わざわざ来県し、これを観察された。これは付近の山中で採り株分けして3年間で殖やしたものとのことであった。

その後NHKテレビにトリカブトの1種を栽培している広い畑が放映されたが毒草でも花の形が珍しく色が濃いので観賞されるのであろうか。門田博士に深謝申しあげる。

〔植物ニュース〕152. ケヤキ *Zelkova serrata* Makino

東筑摩郡四賀村会田小学校の南斜面は、急傾斜地災害予防工事が始まり、7本のケヤキの原木が伐採された。その内5本の年輪等が調べられたので報告する。(長さの単位は cm)

| No. | 年輪数 | 長 径 | 短 径 | 幹 囲 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1   | 130 | 89  | 73  | 263 |
| 2   | 87  | 59  | 45  | 143 |
| 3   | 145 | 91  | 84  | 278 |
| 4   | 75  | 89  | 54  | 217 |
| 5   | 66  | 49  | 47  | 157 |

1990年3月21日調査 (横内文人・横内正)

〔植物ニュース〕153. モウズイカ *Verbascum blattaria* L.

欧州～北アフリカ原産の帰化植物である。1990年7月8日 PTA 研修旅行の折、長野市松代町西条の地震観測所近くの路傍で採集した。これは、長野県下2例目の採集である。1例目も筆者が1989年8月4日に東筑摩郡四賀村会田で採集している。

(横内文人)

〔植物ニュース〕154. キクタニギク *Chrysanthemum boreale* Makino

本種は、美しい黄花を咲かせる。県内分布は諏訪と千曲川水系である。勤務校の遠足の折に採集した。1990年10月18日に現地を訪れたが、株数も増加している。犀川水系では初の記録である。

採集記録：1988年10月19日、東筑摩郡四賀村執田光。(横内文人)

〔植物ニュース〕155. ホザキヤドリギ *Hypochaeris tanakae* Hosokawa

松本市開明小学校校地内のシラカンバに寄生している。1990年7月10日、同校の清水隆夫教諭より生標本を恵与された。本種は全県的に報告されているが、その産量は極く少ない。清水氏に感謝します。

(横内文人)

〔植物ニュース〕156. シロバナムラサキウマゴヤシ *Medicago sativa* L. f.sp.

本種は、欧州原産の帰化植物で、花は淡紫色である。この白花品を採集した。1990年9月2日、松本市山田。(横内文人)

〔植物ニュース〕157. セイヨウオオバコ *Plantago major* L.

欧州原産の帰化植物である。オオバコに比べて大型で花穂は柄とともに30～60cmある。種子は、1果中に8～10個ある。今まで県下各地の植物目録でトウオオバコ *Plantago major* var. *japonica* Miyabe と報告されているものとの比較検討が必要である。県下初採。1990年7月30日、東筑摩郡四賀村反町。なお同所には、紫花と白花がある。

シロバナムラサキウマゴヤシ、セイヨウオオバコ、ホザキヤドリギ等についてご教示いただいた神奈川博物館の高橋秀男氏に感謝します。(横内文人)

〔植物ニュース〕158. シロバナガガイモ *Metaplexis japonica* Makino f. *albiflora* Honda

ガガイモの白花品である。県下初採。母種の花は淡紫色である。1990年9月8日、東筑摩郡四賀村落水。(横内文人)